

2023. 7. 10

No.235

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)



35周年祝賀会で「銀河通信」を続ける力をいただきました

運営委員長の小野有五さんをはじめとして10数人の運営委員が35周年を祝う会の準備をしてくださり、5月20日に50人の読者にお集まりいただき、温かく楽しい祝賀会を開くことができました。東京や、日光、旭川など遠方からもいらしてくださいました。

2017年4月に200号を祝う会から6年が経ちました。その間に我が家の状況は一変しました。私は夫の介護をしながら、銀河通信の発行を続けています。植村裁判で、事務局として共に頑張ってきた林秀起さんが今年亡くなりました。定年前まで朝日新聞記者として

「銀河通信」とみな子さん35年間の歩み インタビューのまとめ 小野有五

「銀河通信」と、みな子さんの35年間の歩みを、年表とパワーポイントを使いながら、みな子さんに適宜インタビューするかたちで振り返ってみました。この35年間は、年表で緑の線を引いた2002年までの前半と、線を引いた2003年以降の後半と、大きく2つの時期に分かれるように思います。



「銀河通信」は1988年から出し始めたんですけども、やっぱりそこに至る歴史が、その前からあるわけですね。それをたどると1975年というのが大きなきっかけで、当時、みな子さんがいた旭川の石狩川で、製紙工場から水銀が出た。それで「石狩川水銀をなくす市民の会」というのが結成されて、臨床検査技師だったみな子さんが、それに参加された、というのが原点だったように思います。それから大雪山の自然保護運動に関わり、高木仁三郎さんの反原発の出前講座に加わり、そういう中でみな子さんの自然を守りたいという思いがだんだん強くなってきて、札幌への移住をきっかけに、「銀河通信」が始まったんですね。最初は家庭新聞として続けていたわけですが、やはり単に家庭の出来事を伝えるだけではなく、もっと広く社会を見て、いま言わなければいけないことを着実に発信していく、いわゆる市民新聞のような形になっていったんだと思います。そして99年からは高山植物の盗掘防止運動とか、北大構内のハルニレの巨樹の保全運動などへの関わりがあり、やはりこの前半期は、自然保護運動が基本にあったと思って緑色の線にしました。

青い線をつけた後半期は、2003年からとしました。この年は知里幸恵さんの生誕100周年にあたり、そこから、今も続いているアイヌの人たちへの差別問題とか、ハンセン病の人たちの問題とか、人権問題、水俣問題、憲法9条を守る運動などに関心が広がっていきます。そして、2014年にアウシュビッツに行ったということが非常に大きなきっかけになって、ユダヤ人差別とか戦争の問題とかだけでなく、アウシュビッツで、マキシミアノ・マリア・コルベ神父が、家族をもつ男性の身代わりになって



5.20 カトリックセンターでの35周年を祝う会

活躍され、「ジャーナリズムは権力を監視しなければダメ」とおっしゃっていた姿を思い出します。私の通信を励まし続けて下さいました。反戦を貫いた童話作家の加藤多一さんも急死されたのも悲しい。「自分の目と耳で感じたことを書いた通信だからいいんだ」とおっしゃってくださったことを思い出します

司会は小野有五さん。はじめの乾杯は芳賀孝郎さんです。



芳賀孝郎さん（日本山岳会会員）

私は来年90歳になります。今は安全に登ることを心がけています。しかし若い時は危険と困難の中をどう登るかということをやってきました。登山歴は70年です。

みな子さんは危険も困難も克服して銀河通信を35周年続けたということに対して心からお祝いします。

乾杯！おめでとうございます。

死んだという大きな犠牲的な行為に初めて触れて、みな子さんは感動されたんですね。

偶然、次の年、2015年に私の妻で、みな子さんとも親しかった妙子さんが突然、脳腫瘍で死んでしまったんですけれども、妙子さんが通っていたカトリック教会で葬儀をやったのです。そこでみな子さんは、お経を聞かせるだけの仏式とは全く違う葬式を初めて経験したんですね。とくにその数年前、仏式だったお父様の葬儀を寂しいと感じていたようです。聖歌をみんなで歌い、神父さんが故人の思い出を語るカトリックの葬儀ミサに出て、もちろん悲しいんだけど、ものすごく温かい気持ちになって、こんな風にして送られたらいいな、とみな子さんは思ったそうです。

それがきっかけになって、私がお自宅に伺って、キリスト教の入門的なお話をご夫婦にさせていただくようになりました。キリスト教って、いわゆるご利益宗教ではないんですね。神様にお祈りしたら願いが叶うような、そんなもんじゃないわけです。キリスト教でいう神様は人間を超えた存在だから、人間の願いを聞いてくれるとは限らない、人間とは違った判断をするわけです。それでも、たとえ自分の願い、祈りとは違った結果になったとしても、神様は、自分のためにいつも最善のことを、最善の時に準備してくれているんだと信じるのがキリスト教です。これはある意味、仏教とも似ていて、自分を捨てた時に苦から自由になる、執着から解放された時に、悟り、安穩(ニルヴァーナ)が来る、というのがブッダの教えです。そんなことをお話ししてきました。

夫の澄生さんがまず洗礼を受けて、今は、「クリスチャンになってよかったよね」って言っているそうです。そして「自分は運よく生き残れたんだねって」、この2年間そうやって自分が生き延びられたことを初めて理解した時に、看護師さんから、「それでクリスチャンになったんですか」って言われて、「そうなんですよ。このままみすみす黙って死を待っているのはとても耐えられない。もちろん手術して成功するかどうかもわからないけど、でも生きられる限り生かしてほしいな、っていう気持ちで手術受けたんです」って言ったようです。

統一教会とかオーム真理教とか、怪しげなものがいろいろあるので、わからないでもないですが、一般に日本人は、宗教というものに対して、まず変な目で見る、警戒します。でもこれは実は明治政府の方針だったのですね。国は天皇を神として日本を統一しようとした。だからそれ以外の宗教はみんな敵になったわけです。日本では天皇が神なのですから、それを超えた存在を認める宗教はすべて危険ということで、仏教もキリスト教も排斥されました。それ以来、日本人は変わってないのですね。それは日本にとって大きなマイナスじゃないかなと思うんです。人間を超えた存在にきちんと向き合うということ、日本人はもっとやっていくべきではないかなと私は思います。



北海道新聞5月31日朝刊に「『銀河通信』35年読者に愛され」のタイトルで記事になりました。<http://www13.plala.or.jp/minginga/> から読めます。印刷通信をお読みの方、機会がありましたら読んで頂けると嬉しいです。

お祝いのスピーチ

松浦幸子さん (NPO法人クッキングハウス会代表)



調布という街でクッキングハウスという“小さな心の居場所”をやっております。

人生の途中で心の病気を受けた人たちが普通に生き、病院じゃなくて街の中で一緒に暮らしていきたいということ、ずっとやり続けています。そして毎日、「おいしいねから元気になろう」を合言葉にして、玄米食のレストランをやっています。大変評判が良くて、毎日繁盛しております。

心の病気をした人たちは本当に大変で深刻なので、今日の前にある人たちを何とかしなければいけないので、どうしても自分の世界が少し狭くなるんです。

銀河通信はアウシュヴィッツ博物館で知った差別や戦争の残虐行為などを目の当たりにして、平和の尊さ、環境問題、人権など、私が気がつかないといけないとか、もっと知らなければいけないということをみな子さんが教えてくれるんです。映画のことも本のこともこれ見たいなとか、そんなことをずっと思いながら通信が届くと隅々まで読みます。

クッキングハウスはいろんな講座を開いているんです。代表的なのが(対人関係の場面で話す練習をする)SST、ソーシャル・スキルズ・トレーニングなんですけども、そこでみな子さんも勉強に来てくださったんですね。すごいでしょ。北海道からね。私たちこんなに弱い立場の心の病気をした人たちのところから学んでくださっていることを本当に感謝しています。

その想いを込めて歌います。フォークシンガー 笠木透さんの詩です。「私の子どもたちへ 父さんの子守唄」は私の大好きな歌ですが、みな子さんの活動を全部ひっくるめるとそうなるんじゃないかと思って歌いたいと思います。

生きてる鳥たちが生きて飛びまわる空をあなたに残しておいてやれるだろうか父さんは／目を閉じてごらんなさい 山が見えるでしょう 近づいてごらんなさい コブシの花があるでしょう♪(以下略)



寺島一男さん

(大雪と石狩の自然を守る会代表)

旭川から来ました。みなちゃん、自分の心の中に燃えてくるものを年を重ねるごとに燃やし続けているのではないかとこのふうを感じました。やっぱり彼女自身が周りの人といろいろと付き合っていく、素敵な人を作っていくことによって自分の炎を大きくしているのではないかと思いました。

彼女と初めて出会ったのは1974年11月27日なんです。今、僕が代表をしている「大雪と石狩の自然を守る会」は今年2月で50年になりました。大雪山の真ん中を縦断する縦貫道路の建設問題が持ち上がって、それを何とか止めたいということで会

をつくったんです。守る会で「イタイイタイ病」という映画を上映する機会があったんです。11月27日は開催予定の3日前なんです。それが小雪が舞い雨まじりの天気でした。、チケット集約のため事務所に集まっていたら、ほとんど人が来ないんですね。今日はもう帰ろうかというときに飛び込んできたのがみなちゃんだった。初めて見た時、おかつぱの高校生かと思った。(注みな子25歳)。上映会のチラシの住所だけを頼りに、髪を濡らしながら来たんです。僕はそれを見たときにこういう人がいるんだ。本当に涙が出そうになった。彼女をすぐ誘うと事務局員になり、1975年から会の機関紙の編集長になった。この10年の間に石狩川水銀汚染問題や大規模林業圏開発問題など、全国的に大きな影響を与えた問題のまっただ中で飛び込んで大活躍をした。その体験をベースに札幌に移ってから次々と自分の世界を拓けていった。その軌跡は銀河通信に見事に映し出されています。

あの時の高校生のような「少女」の中に、このような熱い火が燃え、それを絶やさず今日に至っていることはとても感慨深く、すごいなと思っています。



貞兼綾子さん

(ネパール地域支援NGO「ランタンプラン」代表、チベット研究者)

コロナの前でしたけれど、その頃は鎌倉に住んでいて、中村敦夫さんの「線量計が鳴る」という一人芝居を企画したんですね。それを見にいらしたのがみな子さんでした。小野有五さんとは1982年くらいから知り合いで、ヒマラヤとの関係は1974年からですからずいぶん長くて、実は2か月前にヒマラヤから帰ってきました。私がずっと何十年も通っている村が4000メートルなんです。ヘリをチャーターして4000メートルに一気に登るんです。

泊原発とか、それから植村さんの運動とか、ラムサール条約のことなどが小野さん経由で入ってきたんですね。そこに綺麗な表紙の通信がありました。私も「ラバーズピース」というメールだけですから定期的でもなんでもないし、みな子さんのように深掘りをするのもなく、頭に浮かんだようなことをちょっと皆さんにお送りしたりしています。みなさんのお話を聞きながら本当に今日ここへ来てよかったなと思います。

塩川哲男さん

(核戦争に反対する北海道医師・歯科医師の会事務局長)

専門は脳神経内科で勤医協札幌西区病院で診療しています。

みな子さんとは銀河通信を出すちょっと前から今はない勤医協丘珠病院で一緒に仕事をしていました。当時からみなさんは病院の院内広報紙「月刊おかだま」を手書きで出していて、その頃からの付き合いになります。

1989年に北海道反核医師の会ができました。来年6月に35周年。やはり機関紙を年に2回出して私も機関紙の編集をやっていますので、銀河通信の継続を応援しています。今、核兵器の問題もそうだし、原発の問題も非常に重要な情勢になっていて、理想を捨ててはいけないと思うので、これからも頑張っていきたいと思います。



宮本紀子さん (長年の友人)

みな子さんとは「大雪と石狩の自然を守る会」で出会いました。40年以上前ですが、共に事務局をした時は本当によく語り、よく飲み休み



の日は行事があったり山に行ったり、本当に元気だったと思います。私は数年で事務局を引いて結婚を機に東京に行きましたが、仕事と子育てと介護と目の回るような時期を過ごしていました。銀河通信は創刊号から送ってもらっていました。北海道の自然の素晴らしさに癒され、それからいろんな社会の刺激を受け、いろんなことを学ばせてもらい、彼女のエネルギーをもらいながら生きてきました。私は東京で保健師をしていましたが、松浦さんともかなり昔にお世話になりました。

みな子さんには、これからも自分の健康を守りながら、発行の間隔が空いても続けてもらって、エネルギーを私たちにもいただけたら、と思っています。



高橋明子さん

(猫の事務所通信発行人・小樽詩話会会員)

私がみなさんの名前を知ったのは何年前かに札幌地方裁判所でしょうか。泊原発を廃炉にする会の裁判の時にチラシを渡されまして、それが銀河通信だったんです。それを見てあまりにも花の写真が美しいのど中身がすばらしいと思っていたんですが、みなさんが一人で作っているということすごく驚きました。

私の出す「猫の事務所通信」を発刊したのがなぜか1999年9月9日なんです。それから数年後に憲法9条のことがにわかに騒がれるようになったので、何か不思議な声を感じています。

スピーチ後は藤田春美さんが「みんなで歌いましょう」と出席したみなさんと「赤いカーナ」と「Amazing Grace」を唱和しました。花束贈呈は東京からいらした齊木登茂子さん。平和運動に奮闘しているクリスチャンです。

福原正和さん (反核医師の会)

閉会の言葉を述べることを葉で知りました。少し樋口さんについて語らせてください。

小さな体の中にどんなエネルギーがあるのかなと思っていつも読ませてもらっていましたが、樋口さんの価値は、「自分で見て歩いて考えて」書いている。

その時代の中で、本当に水俣の石牟礼道子さんやアウシュヴィッツやハンセン病、そういうことを自分の足で歩いて実際に見て考えて書いているという。2003年に私は樋口さんに誘われて改めて知ったんですけど、知里幸恵と金子みすゞの生誕100年という会にも参加させていただいて、やっぱり今大事な思想の源流をね。そこで100年前のその方たちから学んだということもありますし、それからご存知だと思いますけど、植村隆さんの裁判、これは今非常に大事な裁判だった。みなさんが中心的な役割を果たしていました。



今はマスコミとかネットでは本当に真実はなかなか見えません。自分が見て自分で考えるということ。今本当に壊れているじゃないかなと思っています。234号の美しい表紙で美しい写真と。本当に私はすごいと常に思っているんですけども、そういうふうに出し続けた樋口さんのご努力の35年に敬意を表して、そしてまた皆さんがこういう形で集まれたことに一緒にみんなで確認し合うということで、今日はどうも皆さんありがとうございました。

不思議な縁を大切にしたい 高橋 備

「週刊金曜日」1421号、63ページに発行人、植村隆社長の記事として「祝『銀河通信』35周年 山好きの樋口みな子さん」が載っています。5月20日(土)、カトリックセンターで祝賀会が開催されるということで私も参加させて頂きました。

樋口さん曰く、最初はほんの小さな20名程度の人数で想定していたのが50名を越える皆様が、しかも



全国からお集まりになり、とてもびっくりですと話されました。

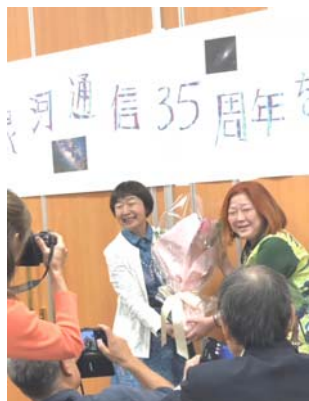
私が樋口さんと接点が出来たのは、かでの2・7で開催していた、短歌の会でのお仲間の紹介でした。2017年には銀河通信200号記念の会が開催予定され、私も是非参加したいと張り切っていた矢先、突然腸血栓の激痛に倒れ、勤医協中央病院に救急車で搬送され、運よく医師の手厚い応急処置や、三度の手術を受け、漸くこの世に生還したという次第です。

そしてある時、定期検診時に病院で身長の高いご主人に付き添いながら介護されていたみな子さんのお姿をお見かけしました。とても不思議なご縁を感じました。時は6年も経ち、今日このようにみな子さんの「銀河通信」発行35周年記念に、出席できたことに天に感謝の心持ちです。後で分かった事ですがみな子さんも私と同じ夕張の高校だと知り、また私の短歌の会でのお仲間、若松氏の妻、文筆家みき江さんともご縁があったと聞かされ、更には私が何度か通った札幌映画サークルの主要メンバーのお一人とは！不思議さでいっぱいです。会は小野有五さんの和やかな雰囲気漂う司会の元、フレンドリーに進行しましたね。

みな子さんに関りのある多くの方々からお祝いのスピーチがありましたね。同席された方たちが、不思議な力の持ち主の方だとみな子さんを絶賛しておりました。どうぞ、その不思議な力で我々読者を少しでも勇気づけて、和ませて頂ければと思います。あまり無理せず、少しだけ頑張っ、体調には十分にお気を付

け、益々ご活躍下さいませよう願っています。

高橋 備さんも長い読者です。毎回のようにカンパや切手を送ってくださり花の写真を撮ってハガキに編集して送ってくださいます。



企画から当日の準備まで奮闘された運営委員のみなさん

祝賀会の撮影：及川文さん

祝賀会後に届いたメッセージ（敬称略）

メールが不具合で届いていませんでした。

ドイツにはウクライナからの難民が100万人以上入っていて、シリアやアフリカからの難民もまた増えているだけに、自治体は悲鳴をあげています。財政や住宅の点でもう限界ということでしょうか。さらには、ウクライナからの難民が優先され（難民の資格があるかのチェックなどが無い）、差別だという声も出ていた時期があります。

プーチンが悪い、と言ってしまえばその通りではあるにしろこれをきっかけにNATOが拡大され、軍事に多額の税金が出されるのが当然のような雰囲気になります。ドイツでは鉄道普及（特に貨物輸送）の遅れ、医療機関の不足、介護や教員の恐ろしいほどの不足など深刻な問題が山積みなのに、軍備の強化やウクライナ支援が優先されるのは受け入れ難いです。私にも解決方法は分かりませんが、愚痴りたくなります。

いつもながら、樋口さんのご努力とエネルギーを尊敬しています。お体をお大切に。どうぞお元気でご活躍をお祈りしています。

（ドイツ・フライブルク市 今泉みね子）

みな子さん、おめでとうございます！ 記念写真を拝見したところです。病み上がりで欠席しましたが、楽しさは十分受け止めました。懐かしいお顔、すごいお名前、そして皆、なんと和やかで優しいお顔。みな子像の集大成にも見えます。何にも縛られていない、境界や限界のないのびやかさに癒されました。これからもみな子ペースで！

（北広島市・山口力三）

本や映画はもちろんですが、山の花が好きなので、いつか逢いに行きたいな。北極星のように銀河のめあてでいらしてくださいませよう。

（埼玉県小川町・小林千賀子）

雲の中、樽前山に登りました



6月14日、朝5時起きして、山の友人と樽前山に登ってきました。2年近く登山していないので、結構登りがきつかったです。

頂上からようやく顔を出した支笏湖 エゾイソツツジ

午後から雨が降るという予報。7時20分から登りはじめました。階段の段差が大きく、曇っていて、支笏湖が見えません。友人は健脚でずっと先に行ってしまうのでマイペースで歩きました。



ウコンウツギとエゾイソツツジがたくさん咲いていました。コマバツガザクラやマルバシモツケ、タルマイソウも咲き始めていました。

頂上には8時20分着。視界がないのでしばらく待つて支笏湖とドームと噴気孔が見えて良かったです。コロナの制限が解けて、登山者が増えているとか。平日の早朝で静かな樽前山を楽しみました。(文と写真:樋口みな子)

始めて知った沖里河山



6月5日、夫のデイサービスの日、山の友人に「近くに山菜取りに行きませんか」と誘われて、短い時間なら大丈夫かなと



サンカヨウ

出かけたのが深川の沖里河山です。

地元の人には良く知られてる山です。タケノコ取りの人たちがたくさん登っていました。

眼下に深川市街地や空知平野の広がりが素晴らしかったです。(上の写真)

サンカヨウが可憐に咲いていました。山菜の収穫はありませんでしたが、オオカメノキがたくさん咲いて涼しげでした。(樋口みな子)



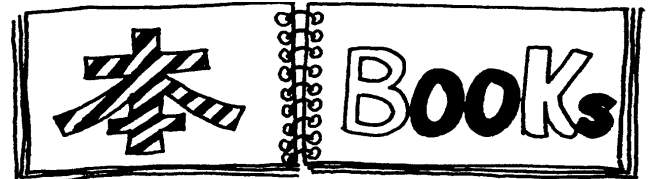
素晴らしい演奏を堪能

6月21日(水)キタラで4年ぶりに開かれた「前橋汀子 アフタヌーンコンサート」で、素晴らしい演奏を堪能しました。前橋汀子さんは、2022年に演奏活動60周年を迎えました。

ピアノはヴァハン・マルディロシアンさん。前橋さんのヴァイオリンとのハーモニーが素敵で感動しました。ヴァハンさんは指揮者としても活動されているそうです。-5-

特に後半はドビュッシーやチャイコフスキー、ドヴォルザークなどの知っている曲が多く、会場が一体になって、音楽を楽しんでいるのが伝わってきました。

35周年祝賀会でお世話になった友人たちにも会えて、演奏後のおしゃべりも楽しかったです。(樋口みな子)



アイヌ民族として語る

大地よ！
アイヌの母神、宇梶静江自伝

宇梶静江著 藤原書店 2970円



35周年の祝賀会の翌日5月21日、白老の宇梶静江さんに初めてお目にかかりました。調布からいらした松浦幸子さんが「白老に行ってみよう」と事



宇梶静江さん宅を訪ねる 撮影：原田公久枝さん前に連絡をもらい、原田公久枝さんに相談すると会ってくださることになったのです。松浦さんは「大地よ」の映画を観ていました。

著書で静江さんは懸命に働き、学び、詩を書き、古布絵でアイヌの世界観を伝え続けてきた波乱万丈の人生が語られます。

静江さんは、1933年に浦河でアイヌの両親のもとで生まれ、貧しいなか兄や姉たちと共に慈愛をたくさん受けました。私は父の転勤で小学2~3年の時に、浦河に住んでいたことがあり懐かしかったです。

政府の政策で開拓に入った人々に、土地を奪われたアイヌの苦難の歴史に胸が痛みました。母方の祖父母は、淡路島から日高の原野に入植した農民です。祖父母も決して豊かな暮らしではありませんでした。静江さん一家は漁や農業で暮らしていましたが、いつも、きょうだい父母の仕事を手伝う日々だったのです。アイヌ差別でいじめにもあいます。聡明な静江さんは、何としても中学校を卒業したくて、札幌に出ます。飛び込んだのが札幌の私立学校の中等部、20歳の時でした。私の母は1925年(大正14年)生まれです。長女でしたが中学の先生から進学を勧められて静江さんが入学された学園の女学校に入ったと聞きました。母は萱野茂さんと同郷で、萱野さんが一つ下だったが優秀な生徒だったとも語っていました。

福島の震災の時に書いた詩が胸を打ちます。「大地よ」大地よ 重たかったか 痛かったか(以下略)物質文明を痛烈に批判しています。

1972年、朝日新聞の「生活欄」に投稿した「ウタ

りたちよ、手をつなごう」が掲載され、反響を呼び、東京都議会に働きかけて東京在住のアイヌの実態調査を求めるなどして、アイヌの精神生活とは何かを考えるようになるのです。

63歳で古布絵による新しい表現の手法を発見し、作品制作活動をはじめます。先住民は大地と共に生きてきました。自然の破壊は私たちの精神性そのものの破壊だと静江さんは語ります。私たちはアイヌの生き方を学ぶ必要があると思いました。

7月8日から「大地よ アイヌとして生きる」上映がキノで始まります。私も楽しみにしています。

(樋口みな子)

少数の意見を大事にすることが 民主主義だ

ヤジと民主主義

北海道放送報道部道警ヤジ排除問題取材班著
ころから 1980円



2019年7月の参院選挙で、「帰れ！安倍辞めろ！」「増税反対！」と叫んだ男性と女性が北海道警察に排除されました。「小さな事件」の深層を追求し続けたのが北海道放送でした。

なかなか地方の話題は全国に広がり

ませんが、ディレクターの山崎裕侍さん、報道記者の長沢佑さんの問題提起に、私は現場にはいませんでしたが、「庶民の声を代弁している」と思いました。この日9人もの人々が排除されたことを知り、権力の乱用に危機感を覚えました

2021年7月15日の朝日新聞の取材に山崎さんは「民主主義というのは少数の意見をいかに取り込んでいくか、みんなが納得して進めるというのが本来のあり方であるはずが、今は強行採決なり数の論理なりでどんどん決まってしまう、政治が全然説明責任を果たしていない」「私たちがふだんから努力していかないと、よりよいものにできないのが民主主義だろうし、そういうところに光を当てて番組を作るのも報道の役割だ」と語っています。

排除された大杉雅栄さんと桃井希生さん(当時大学生)は「表現の自由」を問い、道警を裁判に訴えました。2年間の審理を経て2022年3月に勝利するまでの記録が本書です。

しかし今年6月に札幌高裁判決では大杉さんが逆転敗訴したのです。二人の行為にどんな違いがあるのかと納得がいきません。

元道警釧路方面本部長だった原田宏二さんに長沢記者がインタビューしています。

「ヤジ排除は、現場のとっさの判断ですることにはあり得ない。警護計画を作るのは道警旭川方面本部であり、道警本部の公安二課に報告を上げ、内容のOKを取る。公安二課は総理だ」と明言しています。「警察内部に治安維持のためなら、多少の違法行為をやっても許されるという風潮が広がっている」と述べています。

読者に「ヤジと民主主義」の番組を何度も紹介できたのは良かったです。ヤジすら言えない、小さな自由が排除された先に待つものは何か。いま民主主義のあり方が問われているのだと訴えたこの番組は日本ジャーナリスト会議のJCJ賞を受賞。(樋口みな子)



野枝の情熱が100年後 の現代によみがえる

評伝 伊藤野枝 ~あらしの
ように生きて

堀和恵著 郁朋社 1650円

はじめにで「野枝は今宿(福岡県)の海岸を飛び出し、親が決めた婚家を飛び出し、ダダイストの辻潤のもとを飛び出した。生涯『自由』を求めた人生だった。そして稀代の革命家、大杉栄と共に歩む」とあります。

家」に縛られない自由な女性像。野枝が理想とした世界は彼女の没後100年経つ今日でも実現していません。

貧しい暮らしの中で、叔父代準介に援助してもらい上京。1910年、上野高等女学校の4年に編入しますが、激動の時代でした。大逆事件が起き、幸徳秋水や菅野須賀子が逮捕されてその後死刑になります。

英語教師だった辻潤とはお互いに惹かれあいますが、この結婚も長くは続きませんでした。辻はまったく働かないのですから、破綻は目に見えていました。野枝は平塚らいてうに助けを求める手紙を書いて実現し、のちにらいてうから『青踏』を引き継ぐのです。

妻のいる大杉栄にも手紙を書き、恋仲に落ち、二人は革命家として生きていますが、「自由」を求める行動のたびに、社会から批判され続けました。

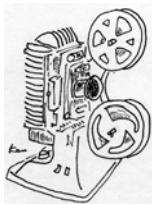
野枝はアナキストとか、大杉栄との激しい恋ばかりが今まで一人歩きをしてきたように思えてなりません。でも生涯で出会った最高の同志だったのではないのでしょうか。自分の信じる「自由」の獲得のために闘い続ける姿には驚きだけでなく、感動を覚えました。

著者は、2017年に共謀罪の法案が成立したこと強い危機感を覚え、「治安維持法」を上回る権限を与えるのではないだろうかと書いてます。

野枝はエマ・ゴールドマンに大きな影響を受けました。エマも貧しく朝早くから夜遅くまでミシンを踏む毎日でした。アナキズムの集会、労働争議に姿を現し、闘争の先頭に立ち、常に官憲の迫害に追われました。エマは同志であるアレクサンダー・バークマンと共に機関紙「母なる大地」を発行したとあります。困難に出会うほど燃え盛る情熱に野枝は深く共感したのです。後に生まれる娘に「エマ」と名付けたほどです。

国家にとっての危険分子と見られていたため、甘粕正彦大尉らの憲兵隊により大杉栄、大杉栄の甥の橘宗一とともに激しい暴力によって殺された伊藤野枝。甘粕は終戦直後まで真実を明らかにすることはありませんでした。

野枝の遺した遺児たちの生き方を描写している部分にひき込まれました。野枝の4女伊藤ルイの生涯を描いた、映画「ルイズその旅だち」は観ました。松下竜一著「ルイズ 父に貰いし名は」に伊藤ルイが詳細に描かれています。野枝の分身のように思いました。フェミニズムの原点は伊藤野枝の生き方にあるのではないのでしょうか。



何があっても賢治の才能 を信じ続けた父

銀河鉄道の父 成島出監督

直木賞を受賞した門井慶喜の小説を「八日目の蟬」「ファミリア」の成島出監督が映画化しました。



宮沢賢治の父のことはあまり知られていません。原作者は資料の少ない父政次郎の人間像を丹念に掘り起こしました。

た。

本作では明治の男には珍しく子育てに熱心で、厳格であろうと努めるも、結局は子どもにはめっぽう甘くなってしまふ、愛すべき父政次郎役に扮するのは役所広司。そして賢くしっかり者の妹・トシ役は森七菜。宮沢賢治役は菅田将暉が演じました。

映画の冒頭、岩手県で質屋を営む政次郎が列車に乗って自宅に戻ろうとしている。息子の誕生の嬉しさが伝わってきます。学校を出た賢治に家業の質屋を継がせようとする政次郎だが、賢治はそれを拒む。おまけに彼には商才というものがないのです。何だかんだと言って、盛岡高等農林学校に進学する。今度は人造宝石を作るなどと大風呂敷を広げる。さらには日蓮宗に入れあげて家の宗教である浄土真宗を批判する。あげくに信仰のために家を出て東京に行ってしまうのです。意外な賢治の一面がユニーク。

なりふり構わずに、息子賢治への愛を吐露する父がユーモラスで二人の掛け合いに引きこまれました。

トシはきっぱりと物を言う独立心旺盛な女性で、大学に進学するほど進歩的なのも頼もしい。何より賢治の物語が大好きで一番の応援者でした。3人の演技が素晴らしい。

賢治にとって転機になったのは、愛する妹のトシが結核になったこと。賢治は文房具店でありつたものの原稿用紙を買って、物語を書きまくりトランクいっぱいにし帰郷。トシに「風の又三郎」を読みきかせるのです。しかし生きてほしいという願いは空しくトシは亡くなります。「トシがいなければもう物語は書けねえ」と叫ぶ賢治。政次郎は「わしが賢治の一番の読者になる。だから思う存分書け」と励ますシーンに泣けました。

賢治は生前無名で、まったく本は売れなかったのです。政次郎や家業を継いだ弟の原稿保存と社会へのアピールがあつてこそ花開いたのです。

クライマックスでは長回しの映像が感動を盛り上げます。賢治の死を前に、政次郎が「雨にも負けず」の詩を全文朗読する場面も感動的。

岩手の大自然も、映画の随所に盛り込まれて美しい絵画のようです。冒頭と対になる列車のシーンは余韻の残るエンディングです。

37歳で夭折はあまりにも早すぎです。

「銀河通信」には何度も読んだ「銀河鉄道の夜」への敬愛の想いも込めて名付けました。(樋口みな子)

教育現場での災害時のあり方を問う

「生きる」大川小学校 津波裁判を闘った人たち 寺田和弘監督



2011年3月11日の東日本大震災で、岩手県釜石市鶴住居地区の約570人の小中学生が避難し無事だったことは多くの人に

「釜石の奇跡」として知られています。

その真逆のことが起きたのが宮城県石巻市の大川小学校です。津波にのまれる形で、全校児童の7割に相当する74人の児童(うち4人は未だ行方不明)と10人の教職員が亡くなったのです。貴重な遺族の証言記録映画です。

原告らは、石巻市と宮城県に国家賠償を求めましたが、この裁判の代理人は吉岡和弘、齋藤雅弘の両弁護士だけです。その勇気と気概を尊敬します。裁判そのものは描かれません。

地震発生から津波到達までには約51分、ラジオや行政の防災無線で情報は学校側にも伝わりスクールバスも待機していたにも関わらず、学校で唯一多数の犠牲者を出した。この惨事を引き起こした事実・理由を知りたいという親たちの切なる願いに対して、行政の対応には誠意が感じられず、その説明に嘘や隠ぺいがあると感じた一部の親たちは真実を求め、市と県に対して提訴に至る。彼らはその間、そして裁判が始まってからも撮り続け、のべ10年にわたる映像を貴重な記録として残しました。

私は最初亡くなった人たちの記録なのになぜ「生きる」なのか分かりませんでした。寺田監督が悩み抜いて決めたのはお一人の原告の言葉でした。あまりにも辛くて、大川小学校での説明会にもこれなかった、亡くなった娘さんのお母さんの言葉でした。「今日ここで娘の分まで、娘と一緒に生きていく決意をしました」

長女を亡くした只野英昭さんは悲しみの中で、説明会などを記録し続けました。未来への伝言だと思えます。学校の対応はどうだったのか？ 生き残った教員は子どもたちの様子は語りません。校長や市からの圧力があつたとしか思えません。

ある時の説明会では校長がしづさが「しゃべるな！」と無言の指示も写しだされました。また貴重な証言などは隠蔽された事実も明らかにされます。こんな責任逃れが許されていいのか！

画期的な勝利を勝ち取りますがこの映画は教育現場での災害時のあり方を問います。「学校を子ども最期の場所にしてはいけない」が深く心に刻まれました。

現場検証の場面、校庭から近くの裏山に5分以内で避難できたのです。誰が登っても登れました。津波が来るまでの51分以内に逃げていたら失わずに済んだ命でした。スクールバスもあつたのにと怒りで涙がこみあげました。(樋口みな子)



本当に大切なものは
無くしてから気づく

帰れない山

フェリックス・バン
・ヒュルニンゲン
& シャルロッテ・フ

アンデルメールシュ共同監督・脚本

イタリアの作家パオロ・コネッティの世界的ベストセラー小説を映画化。

雄大なモンテ・ローザ山麓を舞台に、都会育ちのピエトロと山育ちで牛飼いのブルーノの2人の魂の交流、父との物語を描いた作品。

ブルーノにもトリノで教育をとのピエトロの両親の計らいがあだになり、2人は引き裂かれます。家族とも断絶します。

ピエトロは15年後、ブルーノに再会。ピエトロの亡き父の願いだった山での家作りに挑戦して完成させるのです。二人だけで建てる場面が圧巻。

大人になって知った父の思い、そして自分自身の生き方……それぞれの人生を歩んでいくピエトロとブルーノの濃密な人生が雄大な自然を通して描かれます。

「何者にもなれない」と人生に悩むピエトロに、「やりたいことをやればいい。人生は挑戦だ」と励ますブルーノ。美しい山並みを背景に、対照的な2人の生き様が交錯します。

自然の美しさを絶妙に切り取って映像に散りばめた撮影のルーベン・インペンスの手腕が素晴らしい。

ピエトロも、訪れたネパールのヒマラヤ地方で自分の居場所を見出しました。著書の出版も叶え、作家として出発したのです。同じ頃、ブルーノは牧場を手伝いに来たピエトロの友人ラーラとの間に娘アニータが生まれ彼もまた幸せな時を過ごしていました。ところがその幸せは長くは続きませんでした。ブルーノの牧場が経営難に陥り、2人が多額の借金を背負っていることを知ったピエトロは、ブルーノへ援助を申し出ましたが、ブルーノから激しく拒絶されてしまいます。

「帰れない山」とは私のことではないかと気になってなりません。2007年にカミホロカメツクの雪崩事故で亡くなった、4人の仲間のことを思い出し涙しました。(樋口みな子)

自らの尊厳を守る
ために語りあった女性たち

ウーマン・トーキング
私たちの選択



サラ・ポーリー監督・脚本

自給自足生活を送る宗教コミュニティの中で起きた連続レイプ事件。ミアム・トウズが実話を元にした小説を、サラ・ポーリー監督が映画化。アカデミー脚色賞受賞。

たったの2日間で、村を去るか否か決断を迫られる極限の状況に置かれた女性たち。加害者の男性に対して怒りを露わにする者もいれば、諦めに近い冷静さを見せる者もいました。「赦しは信仰。赦さないと村を追われる」「今まで動物のように扱われてきたのだから

同じように男たちに反抗すべき」「自分の身だけでなく、子どもたちの安全を守るために出ていく」など次第に話し合いは白熱し、「3世代にも及ぶ苦しみを断ち切れなかった責任は女にもあるのではないか」「社会における女性への偏見が男性を駆り立ててしまったのではないか」など、議論はさらに発展していきます。

徐々に深まりを見せる、対話劇に引き込まれました。彼女たちは読み書きができない。にも関わらずなんと知的な会話なんだろう。

寓話のようでありながら、暴力やそれへの無干渉など、現実社会の抱える問題と切り離して見ることはできない見ごたえのある展開に、私はとても心揺さぶられました。

すべての発言を書き留めた青年の公平さにも感動！私の中で「赦し」とは何かを今も考え続けています。(樋口みな子)

博物館だより「リイシリ」を毎月発行
して355号！

文と写真 利尻町立博物館 佐藤雅彦

・「図書館のように利用者が資料を読み解くようになればよいなあ」とうらやましく、“これからの博物館”を作るためには図書館のそんな活動のヒミツを解明する必要があり・・・と、今年度から連携事業などをやってみようとなりました。

「こんぶ原画展」はそのささやかな試みの第二弾



ですが実物資料や図書室の蔵書などをあわせて展示する予定です。

6月4日(日)に久しぶりに杓形登山路か

ら利尻山に登りましたが、山は一気に人が増え、聞くところによると既に山頂の順番待ちが生じていたとか。私はノロノロなので山頂貸切状態。



ボタンキンバイソウ(写真)が満開で心が癒されました。

1～2pの小野有五さんのまとめは234号に同封した葉の3～4pを参照してください。HPからも読めます。

購読料と寄付をありがとうございます
(敬称略) 5.8～6.9

坂井恒俊 須永興司郎 土門寛治 竹田とし子 木村玲子 小川信之 宇梶静江 片山篤子 仁木由紀 江 佐々木睦子 内田由貴子
購読料とカンパ31,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。

35周年お祝い 大井恵子(お菓子) 松浦幸子(お菓子) 貞兼綾子(スカーフと紅茶) 桶田達也(お花) 高松修二(商品券) 甲野恵美(パネル写真) 小宮山あい子(お菓子) 中村秀子(お菓子) 川原勝利(夢の花束) 美味しく、素敵なプレゼントありがとうございました。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2,000円です。web読者のカンパも歓迎します。